インターネットラジオ局がつくる“読む”ラジオ

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2016.05

『東京ラブレター』～インタビューシリーズ～

「病気になっても自分らしく生きられる社会を実現する」を理念に掲げて

一般社団法人 CAN net

理事兼事務局長　千葉直紀さんに聞く

［ちばなおき］

1983 年、仙台市生まれ。中小企業診断士、日本ファンドレイジング協会認定 准認定ファンドレイザー。3 月 12 日～13 日、東京で開催された『ファンドレイジング日本 2016』のセッションで、あべこうーと席が偶然隣りになったことが縁でインタビューが実現。

■一般社団法人 CAN net ウェブサイト　http://can-net.jp/

●ナビゲーター（インタビュアー）
あべこうー、高木祥衣（OurPlanet-TV）

――CAN net ができた経緯について教えてください。

2013 年 6 月に一般社団法人として設立され、北海道旭川市を本拠地として札幌、東京の 3 拠点でスタートしました。きっかけは東京で化学療法・抗がん剤の専門医である代表（杉山絢子さん）と私が同じビジネススクールに通っていた縁があったことです。

私はビジネススクールで代表である杉山の一年先輩に当たります。ちょうど私自身は自分の病気の経験を基に医療の現場に新しい風を吹き込みたいと模索していた時期でした。一人でビジネススクールに入って、そういうことをやりたいとは言いながら実は医療の現場のことがわからず、まったく何も出来ないでいたのです。一年間くらい悶々としていたら後輩に杉山が入ってきまして、話を聞いたらやりたいことが同じだということがわかりました。

もともと私はエンジニアだったのですが、社会人 5 年目のときに重症の心臓病にかかってすぐに手術が必要と宣告されました。目の前が真っ白になりましたね。それまでは病気とはまったく無縁の生活でしたから。それから半年間の入院・療養生活を送りました。入院生活で他の患者さんも見ながら、「こうすればもっと入院生活は快適になるのに」などと感じていました。

――具体的にはどんな活動をなさっているのですか。

一つはがんになる前の学ぶ場づくりがあります。あとはがん・病気になったときのよろず相談窓口です。そして、がん・病気になった後に使いやすいサービスづくりも行っています。

学ぶ場づくりはセミナー形式なのですが、一方的な知識のインプットではなく、自分で気付いたことを持ち帰ることができるような、どちらかというとワークショップに近いものを行っています。参加者は病気を経験された方が多いですね。あとは医療関係者の方もいらっしゃいます。中には病気になったときの外見変化に対応するということで美容関係者の方や、病気になるとお金の悩みも発生しますから、ファイナンシャルプランナーの方も参加されています。

よろず相談窓口では病気になったご本人だけではなく、家族の方からも相談があります。家族内でのコミュニケーションに悩まれる方も多いです。病院には主治医の先生がいたり、病院の相談窓口もあったりしますが、そもそもこれを主治医に相談してもいいのかわからないという場合や、病院に相談窓口があると知らないケースなどがあります。そういった方がインターネット検索で見つけて相談を求めてくださいます。

主治医とは利害関係があって、こんなことを訊いたら怒らせてしまい関係が悪くなるのではないかというような心配がありますし、家族が病気について気になっているけれど本人に直接訊けないというようなことがあります。そういうときに利害関係のない第三者が客観的に見て答えてくれるというのは大きいかもしれませんね。窓口ではどんな相談にも答えらえるスーパーマンがいればいいのですが、なかなかそれは出来ませんからいろんな分野の専門家を巻き込んでチームとして行っています。病気になったことで治療のことだけではなく、それまでやってきた仕事のことやお金のことなどいろんな悩みが出てくるものです。

「がんになっても自分らしく生きられる社会を実現する」という理念を掲げていましたが、現在は「がん・病気になっても―」とか「病気になっても」という言い方にひろげています。その理由はがんだけを特別扱いしないということです。がんの疾病的な特徴はあると思いますが、それは特別ではなくて病気の一つ、体の変化の一つ、人生におけるライフイベントの一つと位置付けてそのような言い方をしています。

――今後はどのようなことに取り組んでいかれるのでしょうか。

CAN net は非営利団体ですが事業部門である株式会社を設立しました。それをきちんと運営していくことが一つです。

もう一つは自分たちの団体だけではなく、他の団体を巻き込んで活動していくことです。病気や生きるということに関して、全部自分たちだけでやる必要はないと思います。その中の一つとして北海道では強く温かい組織をつくろうという実行委員会があります。そこには 20 団体近くがかかわっています。横のつながりを大切にして大目標に向かって活動するということをやっていきたいです。

（まとめ：あべこう一）

※番組『東京ラブレター』は今回で終了となります。詳しい経緯などについてウェブサイト上に報告等を掲載いたしております。長い間、お聴きいただき本当にありがとうございました。

「東京ラブレター」終了のお知らせと所感
http://awapuradio.com/2016/04/07/160407/

『Abe's VIEW』 Vol.18 「バドミントン選手の違法賭博問題　何が悪いか」

熊本地震で被害に遭われたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。私の故郷、山口県でもずいぶん揺れを感じたと聞いています。この地震の発生も一因となったのか、バドミントン選手の違法賭博問題の報道が一時期よりも影を潜めてしまった感があります。

4 月 18 日付の東京新聞にスポーツライターの小川勝さんが「違法カジノ問題　給料の理由 理解を」という記事を寄せていて、とても共感を覚えました。こういう問題が起こると、とかく道徳とか倫理についてしっかり指導しなくてはという話に落ち着きがちです。理解はできますが私自身、何となく釈然としない思いを感じていたところでした。

型通りの道徳や倫理観の話を聞かされても、聞かされた若い選手たちのほうからすればそれを語る側こそどうなのよと感じても無理のない世の中です。政治家の口利き、冤罪事件、企業の隠ぺい体質など、日々そういう情報に接していては心に響かないのも当然でしょう。「おまえらが言うな！」という話です。小川さんはそれよりもいわゆる「企業スポーツ」の選手たちにはなぜ、自分たちが企業に雇用されていながら、スポーツに専念できる環境を与えられているかということを教えることのほうが大切で、これが理解できていないと違法行為に手を出しやすいのだと述べています。

選手たちは会社から同じように給料をもらっていても、他の社員のように営業をしたり物をつくったりするわけではありません。それが許されているのは企業トップによる支援したいという情熱や社員みんなで応援できるという「福利厚生」の目的があるからだという指摘は大いに理解できます。そんな福利厚生たる選手のふるまいに会社がさじを投げたらもはやその存在意義はないも同然。これは道徳や倫理の問題ということではないのです。

自分たちが他の社員と同じように仕事をせず、競技に専念していても給料をもらえるのはなぜなのか。それを理解することでおのずと取るべき行動がわかるというものです。「悪いことをした」と彼らを責める世論の風潮に、ひねくれ者の私は「確かにほめられた行動ではないよね」くらいに思い、どこか嫌なものを感じていましたが、何が悪いかの本質はここにこそあるといえるでしょう。（あべこう一／本紙編集長、Singer songwriter、Radio personality）

ヨムヨム旅行記　美味しいリスボン（ポルトガル）

ユーラシア大陸の最西端にあるロカ岬に立ち海を眺める。中国、ロシア、アジア、ヨーロッパを含む巨大な大陸の一番端っこ。…なのにイマイチ感動できなかったのは私の感受性の乏しさなのか、それとも海に囲まれた島国に住んでいるゆえの哀しさか、とにかく「ふーん」という感じだった。だがリスボンに戻る途中で食べたランチには感動した。カルネ・デ・ポルコ・ア・アレンテジャーナは「肉と貝の煮込みアレンテジャーナ風」で、ぷりぷりのアサリの出汁を吸った柔らかい豚肉がメインだ。パプリカや香菜のエキゾチックな香りに漬かったこの煮込みにレモンかライムを絞って食べる。初めて食べる味なのに、なぜか舌に馴染む。豚肉、アサリ、という馴染の食材に加え、どこか発酵食品を思わせる酸味が日本人に合うのだろうか。付け合せのポテトまですっかり平らげてしまった。

カステラに代表されるように歴史上ポルトガルと日本では共通する食べ物が多いという。海産物の料理も多く、リスボン滞在中食事に飽きることはなかった。イワシの炭火焼きとご飯を街のど真ん中で食べ、タコの煮つけと海鮮出汁の雑炊をお洒落なレストランで食べられるなんて。まさに花より団子の旅だ。

食以外でお勧めしたいのはリスボンの近くにあるレガレイラ城だ。メジャーな観光地ではないのだが、面白い。散歩にぴったりな美しい庭園の敷地には、ユーモアセンスに長けた大富豪の道楽で造られた不思議なカラクリがあちこちに仕掛けてある。礼拝堂の地下へ降り迷路道を進むと離れたところにある城へ出てきたり、らせん状になった長い階段は苔むしてミステリアス、まるで魔法使いの城に迷い込んだみたいだし、真っ暗な地下迷路を抜けるとなぜか池のほとりに出てきたりと、大人も子供も楽しめる。

さて定番の観光地はというと、大航海時代を記念した記念碑、ゴシック・マヌエル様式を備えた華麗な装いのベレンの塔とジェロニモス修道院、坂の旧市街を見下ろすサンタ・ジュスタのエレベーターなどがあるのだが…どうしても焼き立てのエッグタルトの香りに足が向いてしまうのは、きっと私だけではないはずだ。（浅香友里）

Awa Report　外国の方に日本の歴史を教えていきたい

田中俊雄さん。現在働きながら慶応義塾大学大学院文学研究科にて日本史を学んでいます。

田中俊雄さん

将来は外国の大学で、外国の学生さんに日本の歴史を教えていきたいと考えています。理由は日本の歴史を知ってもらって、日本をもっと好きになってほしいからです。日本に対して敵対心を抱いている国と親日国のどちらがいいのか迷っています。

僕はちょうど今、第二次世界大戦に向かっていく昭和 15 年当たりを中心に研究しています。現代からみると、なぜ当時の日本人は戦争なんて愚かなことをしたのかと思いますよね。でも、当時の日本の経済状況は世界恐慌の煽りを受けて衰退していく過渡期にありました。そこで戦争の渦に飲み込まれていく様を、現代の日本人が簡単に批判することができるのかと考えてみるととても興味深いし、現在につながっているところは面白いなと思いますね。

（以前から）歴史には興味があったのですが、自分が人に何かを教えることは性に合わないと思っていました。ところがラジオパーソナリティとして働いていたエフエム多摩放送が閉局となって、たまたま予備校講師の仕事に就いたことで教える楽しさに気付きました。

英語は大学時代から米軍の横田基地の中でアルバイトをして覚えました。それから独学で TOEIC900 点台までスキルを上げました。もともと遊び過ぎて大学時代は就職活動できないくらいに単位が足りていなくて、その後もそこへいることになったわけですが（笑）

不登校、就職活動の失敗などで一旦レールから外れると日本は立ち直りが難しいとよく言われます。でも何かの経験を踏まえたら次の目標に向かってさらに前進を続ける田中さんのお話を伺うと、自分の気持ち次第でいくらでも未来は広がっていく気がしました。田中さん貴重なお話ありがとうございました。（青柳蓉子）

『GREEN BOOKS』～本の紹介～

恋スル古事記（2012年10月）　近藤ようこ 著　角川書店・1188円

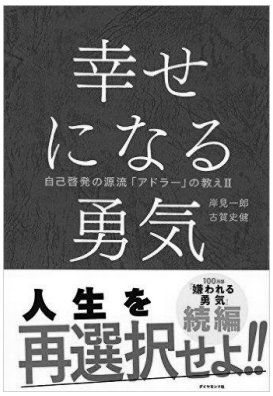
古事記の中の物語5編を漫画化した作品。漫画の作者の近藤ようこは、2014年に「五色の船」（原作：津原泰水）で第18回メディア芸術祭マンガ部門大賞を受賞している。今まで古事記の原著を読もうと挑戦したり、あらすじを調べたりしたことがあったが、荒唐無稽に思えてしまい、物語が頭に入ってこなかった。しかし、この漫画は非常にわかりやすかった。

古代の神々がいきいきとかわいらしく描かれていて、無理なく話に入っていけた。ストーリーごとに漫画での解説ページがあるのだが、ややこしくなく、かつ話の中でわかりにくい部分はもれなく解説されており、その意味付けに納得するばかりだった。

例えば、オオナムジという神が、兄たちに何度も殺されて生き返るという箇所があるが、それは大人になる通過儀礼で子供の人格が死んで大人の人格として再生する過程だという。話中の出来事が、何を暗示しているか考えながら読めば、理解が進むとわかった。他国での伝承や神話ともからめた物語の成り立ちの説明もあり、古代の日本に受け継がれてきた神話としての古事記に、少し親しみがわいた。本書をよく読んだ後に、原著も再度読んでみたい。（大森周子）

幸せになる勇気　自己啓発の源流　アドラーの教えⅡ（2016年2月）

岸見一郎・古賀史健 著　ダイヤモンド社・1620円



「われわれは交友において、他者の目で見て、他者の耳で聞き、他者の心で感じることを学ぶ」。この学ぶ過程こそ、他者貢献であり、目指すところは共同体感覚を得ることだ。本作はアドラーの『嫌われる勇気』の続編。あの青年が教師となり、再び哲学者との対話を通じて、具体的かつ実践的な理論が展開される。

前作で青年はアドラーの考えに触れ、他者への関心を持ち、貢献しようとすることで幸せになれることを学んだ。しかし青年は「公序良俗に反するような書物を読み、低俗な遊びをしている子供たち」に関心を持てず、尊敬もできないという。

そもそも尊敬とは「人間の姿をありのままに見て、その人が唯一無二の存在であることを知る能力」であるという。さらに一人の対等な人間として尊敬し、もしも私が目の前の生徒と同じ興味や関心を持っていたらどう行動するかを考える共感力を身につけることが重要であると諭される。

教育の目的とは生徒の自立を促すこと。そのためにありのままの相手を尊敬し、信頼しあうことで交友の関係を結ぶこと。もちろんこれは教育の現場だけに限ったことではない。読者の皆さんの日々の仕事の中でも信頼関係を気づくことはできる。与えられたものをどう使うかにかかっている。すなわち自分が相手を信用ではなく、信頼できるかにかかっている。「与えよ、さらば与えられん」まずは自分から相手に対し尊敬の気持ちを持ってみよう。すべての喜びは対人関係の喜びであることを信じて。（平川凌兵）

告知ボード

「養護施設の子どもたちとポーランドとの絆～オブジェを修復したい」プロジェクトのご紹介

あべこうー（阿部浩一）が広報を担当している社会福祉法人 福田会（ふくでんかい）がポーランド大使館から贈られた福田会の児童養護施設の子どもたちとの友好の証であるオブジェ作品の修復作業をポーランドから作者を招いて実施し、お披露目のセレモニーを開催するためにクラウドファンディングを始めました。目標金額は50万円で、6月9日23時まで支援の募集を行います。

クラウドファンディングとはインターネット上で行う資金調達の仕組みです。インターネットを通じてたくさんの人々に少額の資金提供を呼びかけ、目標額に100％まで到達した場合のみ、そのプロジェクトの実行が決定するというものです。公開期間終了までに目標金額が集まらないとこちらには1円も入らず、それまで集まったお金はすべて支援者へ返金される仕組みになっています。

1000円からご支援いただけますので、ご負担のない範囲でご協力をよろしくお願いいたします。

https://readyfor.jp/projects/keep-it-up/

お問い合わせ：社会福祉法人 福田会（03-5466-0459）

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやあべこうーがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイト上でダウンロードできます。置き場を提供してくださる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください。

アワプラジオとは→NPO法人OurPlanet-TVで出会った仲間で、2009年に開局したミニＦＭ、インターネットラジオ局です。名称はOurPlanet-TVの略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

編集長：阿部浩一
発　行：アワプラジオクリエイティブ
105-0013　東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F
info@awapuradio.com
TEL: 03-6856-0722 FAX: 03-6856-0723
http://awapuradio.com/